

## 新刊紹介

中田元子著

### 『乳母の文化史——』

一九世紀イギリス社会に関する一考察』

(人文書院、二〇一九年)

赤松 淳子

本書は、母親にかわって乳児に自らの乳を与える「乳母」という存在からヴィクトリア朝イギリスを照射した力作である。乳児死亡率が依然として高かった当時、生母の授乳は当たり前の行為ではなかった。「母性」を象徴する「授乳」をすべての母親の役割として見出そうとする動きが加速したのが一九世紀であった。授乳しない／できない母親たちに雇われ、自身の子供ではなく、他人の子供に乳を与えた女性たちがいた。労働者階級の出身ゆえに記録を残すことが殆どなかった彼女たちの存在を、著者は当時の新聞、医学雑誌、手引書、文学作品、個人の手紙など様々な史料を用いて多面的に分析している。

第一章は、乳母が雇われた社会的背景を論じる。当時、医学界では「母乳哺育」を「自然なもの」とみなしていたため、子供に乳を与えない上流階級の母親に対する批判が高まっていた。母親たちの授乳拒否はそれ以前からの風潮であった。授乳行為は社交に欠かせない女性の身体的魅力を減退させると考えられた。また、夫婦間の性的交渉が母乳の質に影響を及ぼすとされたため、夫たちは自らの性的欲望のために妻が授乳することを禁じた。一九世紀になると育児・医学の言説は授乳を母親の義務とする姿勢を強化していく。それらは、夫たちの態度は改善されていたとはいえ、授乳行為をたびたび拒否し続けた上流階級に対抗するミドルクラスの意識として形づくられていった。しかしながら、授乳の規範化が進んでもなお乳母は雇われ続けた。その理由として、著者は乳児用の製粉乳や器具の技術が途上であった点を挙げている。人工哺育が乳児死亡率を高めるとの医学的見解が示され、身体上の問題から授乳できないミドルクラス以上の母親たちは、乳母の子供を犠牲にしても、自身の子の命のために乳母を雇うという選択をした。

続く第二章では、乳母の雇用数の傾向を大きく掴むと同時に、乳母を雇う側の不安・懸念が論じられる。乳母の需要は一九世紀後半から減退するが、同世紀を通じて医学や

育児に関する言説は乳母を雇うことに対する警戒心をあおった。労働者階級の「気質」が伝染する、乳母の感情が子供に影響するという声は、それ以前から庶民の間でも聞かれたが、一九世紀になっても多くの知識人は乳母による授乳の乳児に対する心的な作用を認めていた。こうした言説はおのずと雇い主の乳母に対する態度を形成していく。高い乳児死亡率が問題視されるなかで、主たる犠牲者が乳母の子たちであるという事実を医師たちはなかなか直視しようとしなかった。彼らが裕福な家庭に乳母を紹介していた職業上の責任を認め始めた時期に、未婚の母を乳母として雇うことの是非が議論された。賛成派、反対派ともに、主張の根底にミドルクラスの家庭性とジェンダーの規範が存在していたという著者の指摘は鋭い。

一章と二章をふまえ、三章と四章では乳母が登場する文学作品が扱われる。三章は乳母を雇うことに対するミドルクラスの不安を、チャールズ・ディケンズの小説『ドンビー父子』（一八四六〜四八年）と医学・育児・民間の言説を詳細に比較することで浮かび上がらせる。労働者階級の気質が乳母を介して自身の家族に入り込むことに対する不安・嫌悪・恐怖感と同時に、乳母となる女性と自身の家族との心の交流を禁じながら、乳母を「商品化」しようとするミドルクラスの心の在り方を分析する。四章では、記録

を残さなかった乳母たちの声を取り上げる。乳母の求職広告および乳母たちの声を代弁していると考えられるジョージ・ムアの『エスター・ウォーターズ』（一八九四年）の分析から、未婚の乳母たちの人格のなかに「リス・ペクタブル」という価値意識を見出し、いく一九世紀末の時代に動きに光を当てる。

第五章は、母親たちの出産後の哺育を日記、手紙、伝記、証言集を用いて考察している。ロバの乳による人工哺育を選んだキャサリン・グラッドストーン（グラッドストーン首相の妻）、ミドルクラスの母性の規範に囚われ、授乳できない自身を責めていたが乳母を雇うようになったキャサリン・ディケンズ（作家チャールズ・ディケンズの妻）、梅毒感染で子供を亡くし、仕事に追われるなか十分な授乳をしなかったビートン夫人など、ひとりひとり異なる経験が叙述されている。労働に押し潰された母親たちの経験に関する分析では、彼女たちが母乳の重要性を理解してはいても、授乳には困難を伴ったことが明らかにされている。

終章は現代の英米社会の乳母雇用をめぐる動向をとり上げ、母親は授乳するべきという一九世紀に確立された規範が、母親たちを圧迫しながら今日にいかにかに受け継がれているかを論じている。メディアで報じられるほど稀になった乳母雇用ではあるが、雇用者である母親たちに対する批判

から窺えるのは、母性の証を授乳に見出そうとするヴィクトリア朝を彷彿とさせる現代人の意識である。

付章は、日本の江戸中期から明治初期にかけての育児哺育の言説分析である。明治期に出されたイギリスの育児書の翻訳本を吟味しながら、日本がどのように西洋の哺育を受容したかを翻訳前後の時期の言説を比較しつつ論じる。江戸時代の育児書は生母による授乳を「自然」とみなしたが、授乳しない母親をイギリスの育児書のように非難することはなかったという。しかし、明治期に入り、読者が父親から母親を想定したものへと移り、授乳しない母親への視線は厳しくなった。生母による授乳は近代化の過程でより強固に規範化されたと述べる。

歴史を学ぶ者が本書を読んで印象付けられるのは、研究の視点の鮮やかさであろう。著者は、子供の命をかけて交わされる人々の緊張を孕みながらもどこか切ないやり取りを、家族史、女性史、ジェンダー史、医学史、社会史が交叉する地点に据え、当時の社会を活写している。冒頭でも述べたが、乳母たちの声を史料から浮かび上がらせることの困難は、著者による多様な史料群の精緻な読みから強く感じることができる。そのうえで彼女たちを取り巻く人々の意識を様々な言説や表象から浮き彫りにしていく著者の研究手法に筆者は魅了された。これまでの上記の分野

の歴史研究では、「乳母」は叙述の遠景の一部にすぎなかった。本書は社会の周縁としての彼女たちの存在に着目し、そこから子供たちにとつての限られた糧であった「母乳」の分配を通して生まれる人々の対立、葛藤、そして繋がりを見事に描いた。

本書はまた、子育てと格闘し、そのあり方を模索する現代日本に生きる我々にも大きく開かれている。幼い子供たちが命を落とすニュースが日々報じられるなか、一九世紀のイギリスの言説・表象と今日のものとは比べながら読み進めることも可能であろう。子供が命を落とす状況は、年齢によるのみならず文化や時代においても異なっており、記録を残す人々の眼差しにこそ歴史が宿っている。子供の命を取り巻く二一世紀の日本の文化は歴史としてどのように記されるのか、そう考えながら本書を閉じた。学生のみならず一般の読者にも薦めたい一冊である。

（文京学院大学外国語学部・助教）